

12月6日 待降節第2主日

バル 5:1~9 フィリ 1:4~11 ルカ 3:1~6

1. ルカ

v.2 「…… 神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。」

私たちがこの洗礼者ヨハネに関する福音書の記述を、あたかも日本の昔話を読むときのように、“昔々あるところに……”という感覚で理解するなら、「あなたたちは聖書も神の力も知らない」(マコ 12:24)との叱責を受けることでしょう。

神の子イエス・キリストの第一の来臨から始まった、神の国に向かっての“救済史”という時間の流れの中に、福音を聞いて歩んでいる私たちの教会が存在することを、待降節第2主日の朗読配分の中で、洗礼者ヨハネの声は指し示しているのです。

中世以来一般に用いられてきた AD(anno Domini = 紀元)という年の数え方に加えて、BC(紀元前)というもう一つの数え方が通用するようになったのは、18世紀のことだと言われています。私たちはこれらを何気なく使って一般の歴史を学んでいますが、実は新約聖書は初めから救済史を、キリストの第一の来臨を中心として過去と未来へ向かう、連続した時間の中での出来事として語っているのです。

キリスト教会の中でも特に原理主義的傾向の教派の人々は、聖書を文字通りに信じることを強調することによって、“聖書に書いてあることは何でも全部同じ価値がある”という解釈をします。しかし新約聖書は、「皇帝ティベリウスの治世の第15年、…… アンナスとカイアファとが大祭司であったとき」に現れたナザレのイエスの行為が、そこから過去と未来が解釈されるべき、すべての歴史の時間的中心であると主張しているのです。

現代の通俗的キリスト教の一般的な傾向は、このような新約聖書が語る救済史の、神の国の到来に至る時間的展望をあっさり捨て去って、しかもなお自分たちはキリスト教の信仰に立っていると主張していることです。しかし聖書においては、神の国の到来に至る救済史の時間的展望は、新約の啓示から除去しても良い“神話的な枠”“古い時代の説明方法”などでは、決してないのです。

「神の言葉が……」(v.2)。そうです、私たちが神のことばを聞くということ、それを受け入れるとは、そこからすべての歴史が解釈される時間を中心として、キリストの第一の来臨を受け入れることです。これはただの昔話ではなくて、神の啓示の出来事に関する知らせなのです。

2. フィリ

使徒パウロは、フィリピの町にいる「キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち」(1:1)のことを、「福音にあずかっている」(v.5)と説明しました。多くの現代の信者たちは、この言葉を“カトリック教会に属している”という意味に理解していることでしょう。カトリック教会に属していれば、信者は“盲人の案

内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手”(ロマ2:20)になったのだと、思い上がったります。

しかし使徒パウロが「福音にあずかっている」と表現した内容は、“キリストの日に備えて、本当に重要なことを見分けられる”(v.10)ということでした。そのような信仰の成長は神の賜物であって、決して一般的な教養や道徳によって得られるものではありません。ですから、「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると」(v.6)、パウロは信じたのです。

このような、神の国の到来に至る救済史の時間的展望に、再び現代の教会が目を開けるようにと、神は今朝のミサの朗読配分を通して呼びかけておられます。

3. バル

v.5 「お前の子らは、神が覚えていてくださったことを喜び、西からも東からも、聖なる者の言葉によって集められる。」

現代のキリスト者である私たちの信仰は、神の国の到来の日に至るまで、「神が覚えていてくださったことを喜び」ことの出来るような信仰であり続け得るだろうかと、反省しましょう。私たちがカトリック教会の名の下に“あのこともしました、このこともしました”と言っても(ルカ13:26 参照)、もし「キリストがわたしの内に生きておられる」(ガラ2:20)ことへの信仰に歩んでいないなら、「何の得があろうか」(マタ16:26)。

「聖なる者(キリスト)の言葉によって……。」 そうです、その日を待ち望むカトリックの信仰は、「聞くことにより、しかも、キリストの言葉(福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ10:17)

実に、待降節は、信仰的に眠っていた人々が目を覚まし、福音への不信仰によって死んでいた者が神のことばを聞いて立ち上がる、覚醒の時でなければなりません。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」(エフェ5:14)

アーメン、ハレルヤ。

12月13日 待降節第3主日

ゼファ 3:14～17 フィリ 4:4～7 ルカ 3:10～18

1. ルカ

v.16 「ヨハネは皆に向かって言った。“わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。”」

待降節第3主日の福音書には、伝統的に洗礼者ヨハネの宣教の記事が配分されています。しかし、その主題はヨハネ自身ではなくて、ヨハネが証言している神の子の第一の来臨、およびその方が成し遂げられた“ただ一度の贖い”(ヘブ 9:12、ロマ 6:10)であります。そのことを理解するとき、洗礼者ヨハネの宣教は現代の私たちにとって、ほんとうに“福音の告知”(v.18)となります。

“聖霊と火で洗礼をお授けになるイエス”(v.16)は、間もなくクリスマスに誕生される“飼葉桶の乳飲み子”ではなくて、すでに到来し、永遠の贖いを成し遂げられたキリストであり、私たちはこの方によって“贖われ、罪を赦されました”(エフェ 1:7)。すでに“キリストに結ばれて、新しく創造された者”(II コリ 5:17)として、私たちキリスト者は神の子の第一の来臨を記念し、降誕祭を祝います。

教会のすべての記念日や祭日がそうであるように、主の降誕の祭日にとっても、最も大切に中心的なものは典礼です。あまりにも多くのイベントが企画されることによって、相対的にミサの大切さが軽視されることがあってはなりません。

“典礼によって、特に神聖な聖体の犠牲において、われわれの贖いの業が行われるからである”(典礼憲章 2)と述べられているように、教会のミサは“すでにただ一度成し遂げられた永遠の贖い”の秘跡的再現であって、決して繰り返しても新たな救いの業の追加でもありません(ヘブ 10:18)。洗礼者ヨハネは、この“すでにただ一度成し遂げられた永遠の贖い”の出来事を指し示すことによって、今なお私たちにとって福音の告知者であり続けているのです(v.18)。教会が待ち望んでいるキリストの第二の来臨は、「今おられ、かつておられ」(黙 1:4)た“その方”の再臨だからです。

2. フィリ

v.4 「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」

キリスト者の喜びの根拠は、「キリストは律法を終わらせました」(ロマ 10:4/フランシスコ会訳)、すなわち“完成されました”ということです。救済史の意味としての“テロス”(終わり = 究極、目標、完成)は、十字架に死に、そして復活したキリストであるという宣言です。以前にはただ期待に過ぎなかったが、今や完成したという福音の知らせです。

フィリ 3:20～4:1 の奨励を前提にして、「主はもうすぐ来られます」(v.5/フランシスコ会訳)という、おそ

らく初代教会の典礼式文からの言葉が、フィリピの教会の信者を励ますために書かれました。現在のローマ・ミサ典礼書では、交わりの儀の中で唱和される“主の祈り”の副文の中に、“わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます”とあり、それに続いて会衆は“国と力と栄光は、限りなくあなたのもの”と応唱します。

私たちはクリスマスを祝うことによって、かつてのベツレヘムの出来事に、洗礼者ヨハネやイエスの弟子たちの時代に、つまり過去の時代の思い出に立ち帰るわけではありません。そうではなくて、私たちの待降節や降誕節のミサに、そしてすべてのときのミサに来てくださる、“すでにただ一度永遠の贖いを成し遂げられたキリスト”を記念するのです。教会は、今もなお救済史の中を歩み続けているのであり、現在のキリストは神の右の座に着いておられます(ヘブ 10:12-14)。

3. ゼファ

v.15 「イスラエルの王なる主はお前の中におられる。」

v.17 「お前の主なる神はお前のただ中におられ ……」

「ミサの祭儀は、キリストの行為であり、…… 神の民の行為であって」と、ミサ典礼書の総則に述べられているように、私たちの王であるキリストはその御言葉の中に、またパンとぶどう酒の形態の下に、現存されます。そしてそのキリストは、「今おられ、かつておられ」ただけではなくて、また「やがて来られる方」(黙 1:4)であることこそが、教会の希望(ロマ 8:24)、福音の希望(コロ 1:23)なのです。

ハレルヤ、アーメン。

12月20日 待降節第4主日

ミカ 5:1~4a ヘブ 10:5~10 ルカ 1:39~45

1. ルカ

v.43-45 「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

救い主をその胎に宿した母マリアが、エリサベトを訪ねて来てくださいました。そしてその挨拶の声を聞くと、エリサベトの胎内で洗礼者ヨハネが喜んでおどりました。神の母マリアが教会の象型であると言われるように(教会憲章 63)、その訪問を受けたエリサベトも、エリサベトの胎内の子も、神の国の到来を待ち望んでいる教会の象徴であると言うことが出来ます。「マリアは、自分について説教され崇敬されるとき、自分の子と子のいけにえへ、さらに父の愛へと信ずる者を呼び寄せる。そして教会は、…… その卓越した象型にいつそう似たものとなり、……」(教会憲章 65)と、述べられています。

神の母マリアが“なんと幸い”(v.45)“祝福された方”(v.42)“恵まれた方”(1:28)と呼ばれているのは、神が彼女を通して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子キリストをお遣わしになったからです。ですからマリアが教会で崇敬されることは、「唯一の仲介者であるキリストの尊厳と効力から何ものを取り去らず、また何ものを付加しない」(教会憲章 62)のです。

私たちのために永遠の贖いを成し遂げられたキリストは、共にミサをささげる私たちの教会に来てくださいます。私たち会衆はことばの典礼と感謝の典礼を通して、父と子と聖霊の交わりの中にいるのです。しかし、そのキリストは、いわば母マリアの胎に宿っていたように、今はまだ天で再臨の日を待ち続けておられるキリストであることを、私たちは待降節第4主日に再確認します。「主はもうすぐ来られます」(フィリ4:5 / フランシスコ会訳)という喜びで、教会もいわばエリサベトの胎内でおどるのです。

2. ヘブ

v.10 「ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」

教会ではクリスマスと新年を祝うと、信者個人にせよ教会にせよ、新しい年の抱負や課題を考えようと思います。今の時代に対して、あるいは我が国の政治や社会に対して、教会は何をしなければならないのかというようなことが問われるのです。しかし現代のキリスト者の最大の弱点は、キリストの御業の決定的な一回性に対する信仰が曖昧になっていることです。

信仰生活あるいは宗教活動と呼ばれるものが、キリスト者個人としての私的なものであれ、あるいは教会としての公的なものであれ、その基礎がキリストの“ただ一度”成し遂げられた決定的な贖いの御業の上に置かれていなければ、一切は損失である(フィリ3:7-8)という認識が、見失われているのです。

「ただ一度」(7:27, 9:12, 10:10)とは、キリストの成し遂げられた贖いの御業が、すべての人間およびすべての時代の救いにとって、決定的に“一回的”、それ故“一回限り”ということです。ミサの中で私たちに会ってくださるイエスは、神の右の座に着いておられる天上のキリストです。この方はかつて十字架につけられ、死者の中から復活された方であり、やがて再び来られるのです。そのような方として、キリストはその成し遂げられた罪の赦しを現在提供し、救われた人々が受け継ぐ御国を保証して下さいます。「なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。」(10:14) 主の降誕の夜半のミサは、そのような“聖なる者とされた人たち”にとっての“聖夜のミサ”なのです。

3. ミカ

預言者ミカは、すべての罪と咎の根が都市とその支配階級にあり(1:5)、それは神の審判の対象であると語りました。彼の預言が当時の人々にいかに強い印象を与えたかは、それから百年余を経ての エレ 26:18 の記述が示しています。

エルサレムが都市であるのに対して、ベツレヘムは片田舎であり、都市の審判と滅亡の後の“残りの者”を救うメシアはそこから出ると、彼は預言しました(v.1)。

現代のキリスト教会にとっての片田舎が、何に当たるのかを私たちは知りません。ただ一つ確かなことは、私たちが見る現代の代表的な教会の姿が、いかに罪と咎と不信仰によって世俗化してしまっているとしても、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会(使 20:28)、すなわち“残りの者”(v.2)に御国を受け継がせてくださるキリストは、再臨されるということです。

vv.3-4 「今や、彼は大いなる者となり、その力が地の果てにまで及ぶからだ。彼こそ、まさしく平和である。」
ハレルヤ、アーメン。

12月25日 主の降誕／日中のミサ

イザ 52:7～10 ヘブ 1:1～6 ヨハ 1:1～18

1. ヨハ

v.14 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

クリスマスは御子キリストの降誕を祝う教会の祭りですが、それはただの昔話のための記念日というようなものではありません。多くの人々が降誕の物語りを、イエスの誕生についての思い出話のようにはか理解せず、これを福音としては受け入れていないのです。

しかし、これを“福音として”聞き、信じて受け入れた人にとっては、「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ 1:7)という、現在の救いの根拠であります。確かに「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。」(コロ 1:13)

ですから、「初めに言があった」(v.1)という、この“初めに”(エン アルケー)は、自然科学における時間の初めを意味しているのではなくて、私たちが神の御業を理解する出発点を指しています。それは、マコ 1:1の“初め”にも、創 1:1の“初めに”(ベレーシース)にも当てはまることです。私たちキリスト者にとって父・子・聖霊なる神は、先ず人間の歴史というものがあって、その歴史に“時々”介入するだけの神ではないということです。世界の歴史は、“時々”神が介入されることによって、宗教的な意味を持つものではありません。

御子の受肉は、私たちキリスト者と教会にとっての、現在の救いと将来の神の国の約束を理解する、唯一の出発点なのです。「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」(v.3)とは、そういう意味です。「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の(国の)栄光にあずかる希望を誇りにしています。」(ロマ 5:2) クリスマスの福音は、人間の悲惨や困窮という緊急事態に際して、“時々”恵み深い助けを提供する“優しいイエスさま”の話、などではないのです。

2. ヘブ

v.2 「この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

私たちが福音を聞いている“今”という時は、この“終わりの時代”の“今”なのです。福音が正しく説教されるとき、そこにはキリストがその救いをもって臨んでくださいます。この方は“ただ一度”永遠の贖いを成し遂げて(9:12)、神の右の座に着いておられる救い主です(v.3)。

私たちが御子の降誕を祝うとき、この御子がすでに成し遂げられた罪の赦しを信じ、そしてまた、なお実現せず将来栄光のうちに現れる「天に蓄えられている希望」(コロ 1:5)に向かって目を開くという、“今”の終末的性格が強調されなければなりません。かつてスエーデンのルーテル教会監督であった A.Nygren

はその牧会書簡の中で、「この“今”に対する終末論的強調があまりにも長い間教会の説教において極めて微弱でありました」と述べました。それから既に60年ほどになりますが、教会の状況は少しも変わっていないように見えます。司祭の説教においてだけでなく、信徒各自が自ら聖書を学ぶ場合にも、聖書のテキストはその福音の終末的な使信の“今”という性質を大切にして取り扱われなければなりません。

残念なことに、聖書の解説を装って、今の時代の悲惨や困窮に対して介入してくれる、“この終わりの時代”には何の関係もない“都合の良い神さまの話”を語る人が多いのです。そのような輩は“キリストの十字架に敵対して歩んでいる”“この世のことしか考えていない”(フィリ3:18-19)人たちです。

3. イザ

vv.7,10 「いかに美しいことか、山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。

…… 地の果てまで、すべての人が、わたしたちの神の救いを仰ぐ。」

現教皇ベネディクト XVI は、その著書“典礼の精神”の中で次のように述べています。「キリスト教典礼は、これまで見てきたように、約束の成就による典礼であり、神を求める人類の歩みにおいて目的地に到達しようとする典礼ですが、しかもなお、希望の典礼にとどまるのです。……キリスト教典礼は途上にある典礼、世界の変容を目指す巡礼の典礼であり、その世界の変容とは、“神がすべてにおいて、すべてとなる”(I コリ 15:28)ときに起こるはずのものです。」(邦訳 p.56)

この“ただ一度”成し遂げられたキリストの贖いを、その勝利と平和の福音を(I コリ 15:54-57、ロマ 5:1)、私たちはミサで聞き、賛美を捧げます。福音が正しく説教され、聞かれるところに、正しい意味における終末的“今”があります。なぜなら私たちの典礼は、“天上の典礼を前もって味わい、これに参加する”(典礼憲章 8)ものだからです。 ハレルヤ、アーメン。

12月27日 聖家族

サム上 1:20～28 1ヨハ 3:1-2,21-24 ルカ 2:41～52

1. ルカ

v.49-50 「すると、イエスは言われた。“どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。”しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。」

主の降誕は固有の八日間をもち、その中の主日、またはこの主日がないときには12月30日が聖家族の祝日です(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 35)。この日の集会祈願には、「あなたは、聖家族を模範として与えてくださいました」とあるので、一見この祝日は聖家族の私生活の一面を主題にしているように誤解されそうです。しかし、本当の主題はそれに続く「あなたの家の永遠の喜びにあずかることが出来ますように」という言葉に示されています。

イエスは、父なる神がイスラエルに約束されたものを実現される方であることが、一瞬その返答によって示されました。実に、イエスの名において、旧約と新約の二つの契約が出会いました(エフェ 2:11-13, 3:6)。しかしこのときには、まだ両親は少年イエスの言葉を理解出来ませんでした。そしてその後には、故郷ナザレでのごく普通の生活が戻って来ました。

v.51 「母はこれらのことをすべて心に納めていた。」

人にはすぐに理解出来ないことがあります。なぜ今……出来ないのですか、と言いたくなることがあります。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と、イエスはペトロに言われました(ヨハ 13:7)。人には、“心に納めている時”も必要なのです。

キリスト教の使信の中から、神の“秘められた計画”(ロマ 16:25、エフェ 1:9,3:3、他)を脱落させると、その途端に聖書は人間に理解出来る“素晴らしいお話”になります。そのような解釈や説明を、私たちはたくさん聞かされて来たのではないのでしょうか。

2. 1ヨハ

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい」(v.1)という聖書の言葉は、これをキリスト者の私的な心の問題として受け止めると、分かり易いように見えます。ところが聖書は、「わたしたちは、今既に神の子……、御子が現れるとき、御子に似た者となる」(v.2)という、神の国の相続人である民の希望(ロマ 8:17,24)を論じているのです。

そのような民である教会に与えられた「神の掟」(v.22-23)は、キリストの体である教会を造り上げていく愛(エフェ 4:12,15)であって、そのように「互いに愛し合いなさい」という言葉を理解しなければなりません。聖書の主題はキリストによって“ただ一度”成し遂げられた贖いの業、神の国の到来に至る救済史です。決

して個人的な道徳や心の安らぎのようなものではありません。

キリスト者にとって、聖書を学ぶとは、「御子にこの望みをかけている人」(3:3)になることなのです。

3. サム上

この物語りも一見すると、エルカナとその妻ハンナの敬虔な私生活を描く“建徳的な一場面”のように読めます。読者はそこから、宗教的・道徳的な教えを学び取ることが出来るかもしれません。しかし……

シロは士師時代の、イスラエルの12部族の連合体の聖所でありました。当時イスラエルは、その連合体の祭儀によって宗教的統合を成していただけで、まだ政治的には何らの統一も持っていませんでした。このテキストの朗読を聞くとき、母ハンナがシロの聖所に上って行って、「わたしは、この子を主にゆだねます」と言って捧げた幼子サムエルが、王国成立に至る過渡期の預言者となって行くという、救済史の序曲としての意味を、私たちは見落としてはならないのです。イスラエルにおける厳密な意味での預言運動がここに始まり、サムエルはその指導者となったのです。

そうです。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には御子によってわたしたちに語られました。」(ヘブ 1:1-2) そして、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神にありますように、」(ロマ 11:36)

ハレルヤ、アーメン。